

海外における日本美術の特別展企画

カーン・トリン

スイス・チューリッヒ リートベルグ美術館 日本・韓国美術担当学芸員



略歴

カーン・トリンはチューリッヒ大学より東アジア美術史の博士号を取得。日本の18世紀-19世紀の絵画制作における社会的文化的文脈について研究している。2015年チューリッヒのリートベルグ美術館日本・韓国美術担当学芸員となる前はベルリン、東京、シドニーで学芸員、日本美術史の講師を務めた。数多くの特別展、およびその関係出版物の編集・執筆を手掛ける。「芦雪」展(2018)、「日本の能、狂言」展(2014)、「神坂雪佳」展(2012)、「歌麿」展(2010)など。現在、ヨーロッパのコレクションにおける日本の物語美術の展覧会を準備中である。

どのような専門分野をもち、どのような施設で働いていても、学芸員が取り組む仕事の中で最も困難であると同時にやりがいのあるもののひとつは、「物語を生み出す」という作業である。その意味で私は、本シンポジウムの開催趣旨に書かれている「学芸員は自らの文化や環境に基づいて展示を作る」という一文に深く同意する。

私は異なる大陸にある異なるタイプの美術館で学芸員として働きながら、展覧会の物語が、多様な利害関係者のさまざまな関心と折り合いをつけ誘導するという長時間にわたる作業の結果として生まれるという事実を何度も目の当たりにしてきた。展覧会がついに初日を迎えるとき、来館者が目にする展示内容は、もはや学芸員の当初の考えやコンセプトを反映するものではなくなっていることが多い。学芸的なアプローチに決定的な影響を与える要因が、常に数多く登場するからである。そこで次の2つの事例を紹介して、私の考えを示したいと思う。

- 1) 「神坂雪佳－近代日本デザインの夜明け」、シドニー・ニューサウスウェールズ美術館
2012年開催
- 2) 「芦雪－犖猛な筆」、チューリッヒ・リートベルグ美術館 2018年開催

ニューサウスウェールズ美術館やリートベルグ美術館のように、非常に幅広いコレクションを有する海外の美術館の場合、アジア美術全般、特に日本美術は、多領域・多文化組織のなかの小規模な一部門にすぎない。国別の展覧会は昨今の時流ではなく、開催は4年から5年に一度の割合になっている。日本美術の展覧会は、高い人気を集める傾向があるものの、同時に輸送が非常に複雑で、非常に経費がかかる。そのために美術館側は、大勢の来館者を呼ぶ可能性があり、その結果として少なくとも損益の差をゼロにできるプロジェクトを選ぶことに大きな注意を払う。

マンガやアニメ、サムライの芸術、日本の幽霊の世界のような話題のテーマ、あるいは村上隆や草間彌生のように世界的に名が知られた現代美術家、または北斎や広重のように著名な近世の芸術家の回顧展を提案すれば、展覧会審査委員会の精査も問題なく通過するだろう。ところが芦雪や雪佳のように――当時は大きな成功を収め、母国の美術史では高い評価を得ている芸術家であっても――日本以外ではほとんど知られていない芸術家のモノグラフでの紹介を実現しようとするなら、学芸員は美術館の委員会の承認を得るために強力なセールスポイントを主張し、粘り強く説得にあたらなければならない。さらに、予算枠と既存の展示条件を考慮し、さらに最も大切な点として地元来館者の好みにも合うように当初の展示コンセプトを変更していく柔軟性も、ある程度求められる。

具体的に言うと、ニューサウスウェールズ美術館で開催された神坂雪佳の展覧会の場合、この芸術家の作品のデザインという側面を強調することに決めた。そこで雪佳を、日常生活にまつわる機能的な品物を装飾するための質の高いデザインの創出を究極の目標とし、自らの受けた絵画を描く訓練が最終的にその目標の達成に役立つとの信念をもった、普遍的な芸術家として紹介した。日本の近代デザインの特徴とされるような表現手法を確立したいと考えていた雪佳は、抽象的かつ装飾的な琳派の美学に、創造性の最大の源泉を見出していた。

シドニーに先駆けて日本と米国で開催された神坂雪佳の展覧会では、雪佳が琳派の芸術的伝統を受け継いでいることには触れなかった。展覧会を知った来館者は、そのつながりを理解する知識をもっているだろうとみなされていたからである。しかし、オーストラリアの来館者の場合、日本の伝統芸術に触れる機会が比較的少なかったことから、雪佳独自の様式の発展に関する美術史的文脈を説明する必要があると考えられた。そこで、江戸時代の琳派の作品も展示に含めて、展覧会の序章を形成した。

さらに、地元来館者の関心に応えるかたちで現代の芸術活動とのつながりも加え、展覧会の描く物語に欠くことのできないもうひとつの構成要素とした。そこで展覧会の第3部は、現代の芸術およびデザインに対する琳派の遺産に焦点を当てることになった。この第3部では、現代日本作家である山口藍と山本太郎、京都のきもの作家、高尾弘と高尾建三、シドニー在住のファッションデザイナー、五十川明を特集した。

物語の三部構造は、展示スペースの構成にも反映されている。近世以前の琳派の芸術家および神坂雪佳の作品については、繊細な素材が用いられていることから、光量を抑えた照明のもと展示ケース内での従来通りの展示方法が求められたため、日本および中国美術コレクションの常設展示用の展示室が使用された。また、タイトルウォールや、障子の外観を模した柔軟性のある間仕切りなど、いくつかの仮設構造物を追加することによって、常設展から特別展への変化を示すとともに、日本の室内の雰囲気 연출した。

一方、現代の作品は、アッパー・アジア・ギャラリーと呼ばれている場所に展示された。オーストラリアの著名な建築家であるリチャード・ジョンソンによって設計されたこのスペースは、「ホワイトキューブ」として作られ、特別展の内容に応じて、その都度新たな配置に変更することが可能である。建築家は既存の構造に加える変更を最小限にとどめて、折り紙の形を模した低い台座のみを設計しており、その上に現代美術の作品が設置された。この展示方法は作品の現代

的特性を際立たせ、下階での、より「伝統的」な展示部分と興味深いコントラストを生み出すことになった。

展覧会「芦雪－獯猛な筆」の着想が生まれたのは 2015 年、串本にある禅寺・無量寺の応挙芦雪館の全面改修計画の知らせを受けてであった。同館には芦雪がこの地域に滞在した 1796～97 年の期間に描いた 32 面の襖絵が収蔵されている。同館の改装に端を発し、無量寺住職で当時の応挙芦雪館館長であった八田尚彦師とコロンビア大学のマシュー・マッケルウェイ日本美術史教授との間で多くの議論が重ねられるなかで、海外での展覧会開催という発想が生まれた。

米国内の数多くの美術館に交渉しては好反応を得られないことの繰り返しの後、2016 年になって、マッケルウェイ教授がチューリッヒのリートベルグ美術館での展覧会開催を提案した。同美術館には、ゲーレルのナインスク、羅聘、長谷川等伯、仙厓義梵をはじめとした、インド、中国、日本の画家のモノグラフによる紹介で成功を収めてきた実績がある。

シドニーと対照的だったのは、「芦雪」の場合、リートベルグ美術館の中核である来館者が、ひとりの芸術家の作品を展示する展覧会に慣れているだけでなく、アジアの伝統的絵画に対する馴染みもあるという事実にも頼ることができたため、端的なモノグラフの展覧会のコンセプトを維持できたことであった。

私たちは、この展覧会を日本国外初の芦雪の包括的調査と位置づけただけでなく、来館者を芦雪自身の旅を辿る旅行に連れて行き、その素晴らしい想像の世界に連れ出すことによって、この芸術家を紹介した。さらに、芦雪の絵画のみに焦点を絞った同展覧会は、このユニークな芸術家の世界を探検するとともに、近世の日本美術における奇抜さ、リアリズム、抽象性に対する先入感を見直す、絶好の機会をもたらすことになった。

この物語を、アドルフ・クリシャニッツとアルフレッド・グラツィオーリという建築家によって 2007 年に「ブラックボックス」として設計された、リートベルグ美術館の広さ 1000 平方メートルに及ぶ地下メイン展示室という物理的空間に移し変えるにあたり、私たちは芦雪の作品をゆるやかな年代順の 6 つの章に分けることにした。そして各章に、彼が短くも多産な経歴の各段階を過ごした場所の名前をつけた。

展覧会の中心は、無量寺にある襖絵の配置を再現することであった。展覧会を代表する「美術品」とみなされたこのインスタレーションは、来館者が絵画を元のままの建築的状況で目にして検証できる、前例のない機会をもたらした。4 面の外壁に沿って配置された展覧会のその他のセクションが、無量寺の所蔵作品を補足した。日本、欧州、米国にある美術館およびコレクションから重要な作品が運び込まれ、来館者は京都、和歌山、奈良、広島での暮らしを追いながら芦雪の一生の各段階をたどることができた。

ひとりの作家の芸術的な発展を再現するという基本概念は類似しているものの、「神坂雪佳－近代日本デザインの夜明け」と「芦雪－獯猛な筆」はそれぞれに異なる物語を提供しており、この点は各美術館の慣行や、そのターゲットとする来館者の関心を考慮して生み出されたものであった。「雪佳」の場合では、デザインの側面を強調するとともに、ひとりの芸術家の作品にとどまることなく、焦点を広げて現代の日本および海外でいまだに意味を帯びている芸術的伝統の全体を探ることによって、これまでまったく知られていなかった芸術家への関心を生み出すことができた。

「芦雪」の場合、リートベルグ美術館の来館者には日本の近世絵画に対する知識と好意が基盤として存在したことから、純粹にひとりの作家の作品に集中することができた。無量寺の本堂を忠実に再現した展示は、来館者に美的経験のみならず、芦雪の創造的過程への洞察をもたらし、彼の並外れた芸術的立場に対する来館者の理解を深め、審美眼に訴えることができた。